

217  
特255  
438

十年六月

東京帝國大學教授  
法學博士 穗積重遠氏講演

心學道話に就て

京都經濟會



始



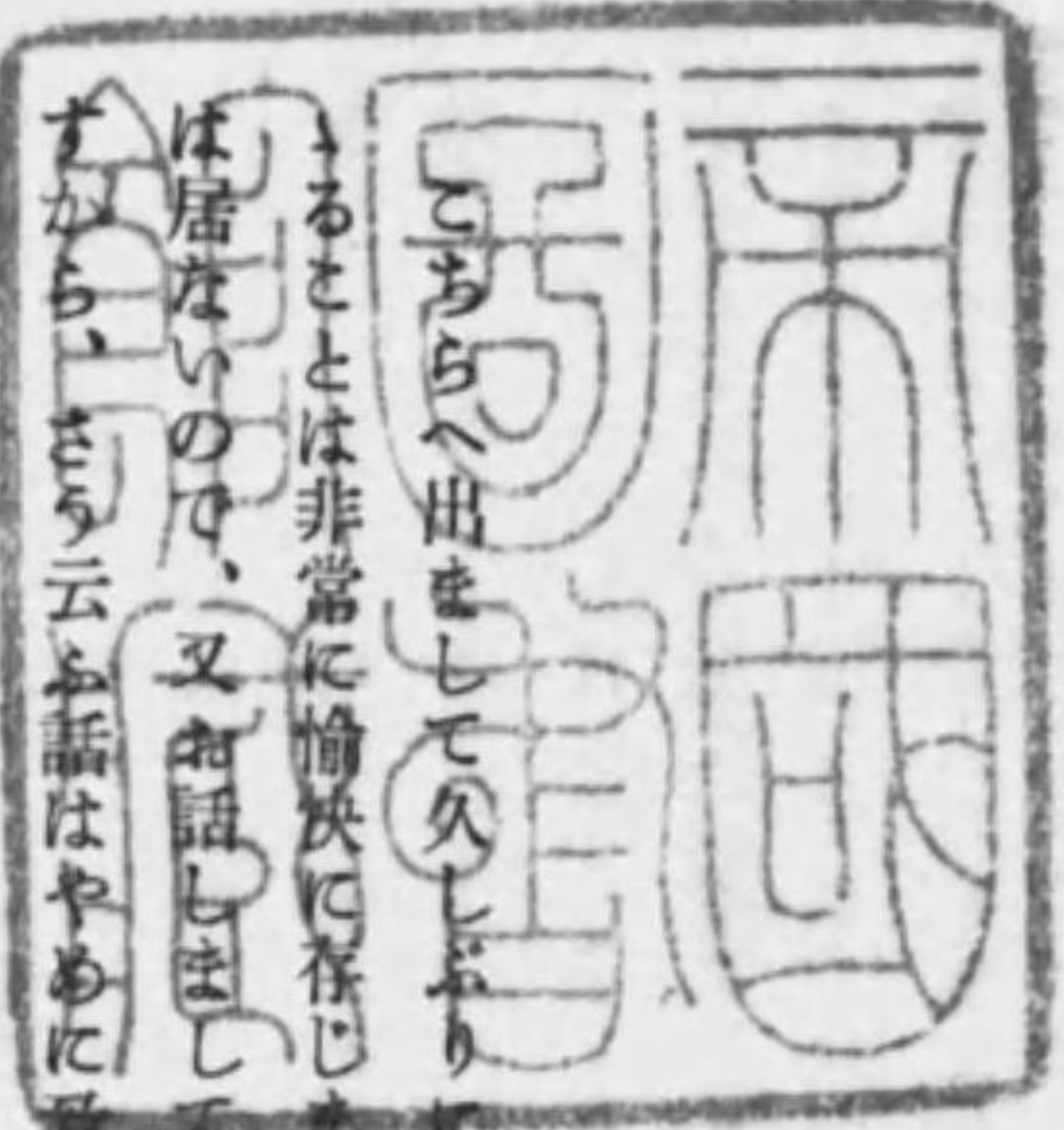
特 255  
438

# 心學道話に就て

(昭和十年四月二日 於例會)

## 穂積重遠氏講演

(文責在記者)



こちらへ出まして久しかりにお目にかゝる方もあり、初めての方も御座いますが皆様にお目にかゝることは非常に愉快に存じます。たゞお話する積りはなかつたもので御座いますから何も考へては居ないので、又お話ししても私共がやりますと、どうも権利義務と云ふことになり相でありませぬから、さう云ふ話はやめに致しまして、丁度今日は神戸へ参り、神戸で講演させられるのでその爲にと思つて一寸した材料を持つて参りましたところ、あちらでは十分話が出来ませんでした、少し私の商賣違ひのことで御座いますが、併しこれは京都と深い関係があり皆様も御承知かと思ひますがそのことを申し上げやうと思ひます。

近頃は色々問題がありましてむづかしいことで御座います。今日の様には世の中の思想が複雑になるとどうも悪化する氣味がある。斯う云ふ場合にはどう云ふ教えが適切であらうか、精神を安定せしむるにはどう云ふ教えが適切であるかと考へて居りましたが、存外昔のものに却つて今日の場合



に適切なものがある様であります。その一つとして近頃大分注目されて参りましたのは皆様も御承知のことと思ひますが心學と云ふものであります。

この心學なるものは京都から起つたもので御座いますが今日の様な世の中に對して或意味で非常に適切なものでないかと思ひます。私の親達はさう云ふ古い物が好きで家に古い心學の書物が澤山あり子供の時からそれを讀んで心學と云ふものに豫て關心を持つて居りましたが、近頃さう云ふものが注目されて参つて嬉しく思つて居ります。今日も心學の本を二三冊持つて参りましたが、皆様も若い者にお聞かせになる御参考までに心學のことを少し申上げて見たいと思ひます。

心學なるものは丁度徳川八代將軍吉宗の時に起つたもので、享保時代、今から二百年程前でありませんが、當時の情勢と云ふものは或意味で今日と似て居る点があります。徳川の泰平がかなり長く續いて大分各方面が行詰つた時代で、又幕府も財政困難に陥り、それを補ふ爲に自然租税が高くなり、その爲農民は非常に苦められた。その上當時は或は旱魃があつたり水害があつたり、色々天災が續き農民は非常に困窮に陥つたのであります。所が一方に於ては段々商賣が盛んになり一般の小商賣人は何れも困つて居つたが、二三少數の金持商人が出来て参り、幕府初め諸大名は自然金の必要からさう云ふ商人から金を借りる爲に少數の商人は段々勢力を得て、多數の人間は困つて居るのに、今日の言葉で言へば少數の資本家が次第に頭を持上げると云ふ時代であつた様であります。その當時の學者は主に漢學者連中でありましたが、その連中の議論を見ても非常に經濟論をして居る、經濟を以て當時の行詰りを救はんとする所謂經濟的政治論を盛んにやつて居ります。今日の言葉で

申せば唯物論的傾向と申しますか、何んでも金を殖せ産業を盛んにせよと衣食足つて禮節を知ると云ふ様な言葉などを基にして、何んでも國を富まさなければならんと、理財と云ふことをやかましく論ずる様になりました。さう云ふ理論も固より結構でありますが、どうもそれだけではない、唯物論だけではどうもいけない、もう少し唯心的な方面を論じなければいけないと云ふ考が出て参りました。その時に出たのが吉宗將軍で、この人は中々偉い人で吉宗將軍は二大政策を實行しましたが、その一つは財政々策で幕府の財政を整理すると云ふこと、一つは一般民衆の教化政策、所謂社會教化運動を起したのであります。たゞ經濟論だけではない、道德の教を以て人民を教化せんとするのが吉宗將軍の考であつた様であります。松平定信公などが出てさう云ふ考が段々盛んになつて参りましたが、丁度その時京都に石田梅巖と云ふ人が出たのであります。梅巖の傳記は詳しく覚えて居りませんが、田舎の百姓で京都へ奉公に出て来て所々で手代になつたり番頭になつたりして、全く一平民で決して學者でもなければ士でも無かつたのであります。併しこの梅巖と云ふ人は非常に考の深い人で、一休人間と云ふ者はどう云ふものか、何の爲に生きて居るのか、何の爲に色々職業等をやつて居るのであらうかと云ふ疑を持つて、色々書物を讀んで自分で學問し段々考を纏めて参りましたが、その考は梅巖の書いた「蒙童評語」などによくうかゞはれますが、心學と云ふ名前は梅巖の弟子の時代になつて出来たので、梅巖の時代には性學—人間の本性の學と言つて居つた様で、詰り汝自身を知れと云ふことを言ひ出したのであります。それは或意味に於いてギリシヤのソクラテスの考とよく似て居るのであります。ソクラテスの時代には段々學問が發達して銘々色

々と理窟を並べ、その中には空理空論を弄ぶソフィストと云ふ様な者も出て参りましたが、ソクラテスは之等に對し人間と云ふものは自分を知らなければならんと云ふことを言ひ出した。ソクラテスは哲學的自覺を主張したので大小の違ひはありますが、梅巖の考とソクラテスの考とは同じで銘々自分と云ふものを本當に知らなければならんと云ふことを言ひ出したのであります。この心學には論語、孟子の文句が多く引かれてありますが根本は神道で、そこへ佛敎の考も入つて居る。要するに神儒佛の三敎を融合し何方にも片寄らない、儒でも佛でもよい所は取入れてそれを根本の唯心の道に歸せしむると云ふ非常に氣の廣い敎であります。

この心學の根本には經濟の安定と云ふことがありますが、たゞ經濟を安定すると云ふ經濟だけではいけない。そこに精神の安定と云ふことが必要であると云ふのが敎の中心で、知足安分と謂ふが幾ら物を殖しても銘々の氣持が十分出來上つて居らなければ足ることがない、殖せしむると云ふだけでは欲張りになつて了ふ、銘々が足ることを知ると云ふ所に達しなければならん。知足安分と云ふことが徹底すれば初めて經濟も安定すると云ふ至極平凡な敎であります。併し平凡であるだけ誰の耳にも入り易いし又誰にも當るのであります。

石田梅巖が當時の人として非常に目の着け所の偉いと云ふことは、當時は士農工商と謂つて士が一番偉いと云ふことになつて居つた。併し國家と云ふものは士だけが背負つて立つて居るものではない、農工商皆一緒に國家を背負つて居るのであると云ふことを申して居ります。又武士道と謂つて道德を武士の專賣の様に思ふが決してさうでない。商人には商人道、職人には職人道、百姓には百

姓道と云ふものがある。天に二途はない、道德と云ふものは武士でも町人でも百姓でも同じことである。武士道だけが日本の道德でないとは非常に強く言つて居ります。今から見ればなんでもない當然のことではありますが、當時としてはなか／＼目の着け所が高いと思ふのであります。

石田梅巖の書いた「都鄙問答」と云ふ書物があります。最近岩波文庫の中にも發行されて居りますが、この「都鄙問答」は心學の根本經典とも稱すべきものであります。言葉使ひなど随分古臭いものでありますが、よく読んで見るとなか／＼面白いことが書いてある様であります。この梅巖は享保十四年に京都で初めて講義した様で、心學は京都で起つた譯であります。梅巖の弟子に手島堵庵と云ふ人があり京都の朝倉町に五樂舎と云ふ舎を作り心學を講じましたが、これが心學道場の大本山であります。それから心學が段々諸國に弘まつて、江戸へは慈音尼と云ふ梅巖の弟子が持つて來ました。その他中澤道二と云ふ人が江戸日本橋に心學の道場を作りました。三省舎と謂つて名前は今でも残つて居ります。

心學を講ずるには道話と云ふものを作つて人を集め話を聞かせたのであります。當時の一般の人にはむつかしい漢學の講義などしても耳に入らない。それで一般の人の耳に入り易い様な仕組で話を聞かせたのであります。その道話と云ふものが大變當つて心學と云ふものが日本全國に弘まつた譯であります。この道話には色々本がありまして私も子供の時から読んで居りますが、非常に話として面白いのであります。それから當時の學者はむつかしい言葉を使つて書物を書いて居りますが、これは口で言ふ通りに書いてありますから當時の言葉を知ると云ふ意味から言つても大變面

白いと思ひます。

道話の中で最も有名なものは御承知の「鳩翁道話」であります。これは石田梅巖の孫弟子位になる柴田鳩翁と云ふ人が話したものをその息子さんが天保五年に出したのであります。この鳩翁道話なるものに色々面白い話がありますが、岩波文庫の中に最近翻刻が出来た様であります。私は新學士が就職して役所なり銀行會社などに勤める様になり、さう云ふ者が寄合を致します時にはいつも読んで聞かせるのでありますが、御参考の爲に一二読んで見たいと存じます。鳩翁は京都に居つた人でありますからその話は京都になつて居ります。

上京邊に、吳服悉皆を渡世にしてゐる老人夫婦がござりました。しかるに家をつぐ男女の子もなく、その身は次第に年はよる、親類縁者よりあれこれ養子をもらうて見てもどうした事歟、とかくそだたず、或は三十日あるひは五十日または七十日長いのが百日ぐらゐ、およそ養子二十人ばかり一人として辛抱する者はない。ナント難儀なものぢやない歟。うろたへると此様な偏屈おやぢや鐵槌婆さまが、得て異國にはあるものぢや。六十七十になるものの、分別の通りに、つゞやはたちのものが、せぬといふて小言ばかりいふて日を送らば一生養子はそだたぬ。めい／＼若いときを願ておもひやがないと、人の子はやしなはれぬものぢや。一生金の番を仕つめて、末期の水一ぱい汲んでくれるものもないやうな身の上に成行くは、菰かぶりではなうて、蒲團かぶりの乞食するやう

なものぢやと町内でのうはさ。されども蔦くふ蟲もすき／＼とやらで、ある所の息子どのが此噂を聞いて、どうぞその家へ養子にゆきたいとおもひ付かれた。たとへるふしに、小ぬか三合もつたら養子にゆくなど、世間ではいへど、人の家をつぐといふは格別の大功ぢや。そのゆゑは、絶えたるを つぎ廢れたるをおこすは、聖人のおしへにして、即ち天地生々の道理ぢや。この息子どのも、こゝに目がついた歟、但しは辛抱の仕にくい家と聞いて、おのれやれ一辛抱して名を隣町に知られうとおもうた歟、何にもせよ有がたい志ぢや。さて縁をもとめて申し入れたところが早速に事／＼のひ、引移つて五七日たつてみれば、なるほど今まで辛抱の仕てがない筈ぢや、中々むづかしい。兩親の氣質、どう歟こう歟と、おもひわづらふうちに、二三ヶ月もたちました、どうも堪忍が成りにくい、所詮爺おやが偏屈をやめる歟、婆さまがしやべりやむかせぬと、モウ一日も辛抱がならぬ。けふは仲人の所へ往かう歟、あすは親ざとへ往つて相談せう歟と、煙草盆引よせさせるあひてに、しあんの中の、折節てゝ親が、あたらしい障子をもとめて、大工どのを頼み、たて合せをして貰はるゝ。ナニか大工どのが、こて／＼とたて合せをしらるゝを見れば、障子の上をけづりては、鴨居にはめて見、下を削りては敷居へはめて見、つひに障子の上下をけづり／＼して、その上障子に弓をはりて、柱のゆがみにあはせ、コツトリと敷居鴨居にはめ、引いて見れば自由になる。かの息子どのは、この仕事を見るときも見ぬとも思はず、たゞうっかりとながめられたが、おもはず持つたる煙管を取おとし、横手を丁とうつて、大いに驚かれたが、これから分別がかはつて辛抱が仕ようなり、トウ／＼この家を相續仕おふせて、懇に兩親を介抱し、末期を見とどけ家名相續をしられたと申

す事でござります。これが有がたい目のつけ所ぢや。其ゆゑは敷居鴨居は、はじめより家についてある道具、障子は外からあらたにはいつてくる道具、具合ようはまらぬは始めよりしれてある。されども障子のはまらぬといふて、家つきの鴨居をけづり、敷居を削りて、障子を其まゝにはめる大工どのはない。はまらぬときには、あたらしういりこむ障子の、上下をけづりて、敷居鴨居にあはせてはめる。人の家を相續するのも、また是と同じ事ぢや。二親は家つきの敷居鴨居、養子は外からいりこむ障子ぢや。てゝ親の偏くつをやめるか、母親のしやべりがやまぬと、相續が出来ぬといふは敷居鴨居をけづりて、障子を其まゝたて合さうとする無分別ぢや。ソナナ大工どのは天がしたに一人もない。はまらぬときには、何分障子の養子が、おれがおれがの無分別を、けづりくゝて家づきの兩親の敷居鴨居に合さねば、工合よう、はまるものではないと、はじめて此息子どのが、氣がついたと見える。サアこゝが入用のところぢや。全く養子ばかりの事ではない、嫁御でも、婿さまでも、奉公人衆でも、此咄の義理をよくのみこみ、親にむかひ、主人にむかひ、夫に向はゞ、かならず當然の道理を得て、今までのつらい悲しい、いまくゝしいが立どころにとけ去つて、大安樂を得ること、疑ひはござりませぬ。

かう云ふ話でございます。これは克己が安心立命の基であると云ふことを教へたものでありますが、私は卒業生の連中に申します、他所へ行けば、そこには舅姑小姑が澤山あるのだから、おれがくゝを出してはいけない、自分の身を削つて行かなければならん、敷居鴨居も直さなければならんが、

それは向ふの話で此方としては十分自分を押へて努めなければならん、それが將來大成の初めである。先生は馬鹿に古いことを言ふと思ふかも知らんが、向ふへ行けば必ず思ひ當ることがあると思ふと話すのでありますが、要するに今日の状態を見るとお互が分に安んずと云ふことが最も大切なことだと考へます。今日は凡ての方面に於いておれがくゝが強すぎる、それが間違の種である。日本國の意氣が上るのは結構でありますが、一方に於いて日本國全体としてかう云ふ風に自分を押へて行かなければ將來の大成は出来ない。今日私が心配することは目的と手段がクチャくゝになつて居る、目的の爲には手段を選ばないと云ふのが一般の考になつて居らないか、國家全体としても個人としてもさう云ふ傾が強くないかと心配致して居りますが、矢張り手段がよくなければ如何に目的がよくてもいけません。例へば政治家にしても政黨を作る以上、自分の政黨を盛んにすると云ふことは目的として結構であります、それが爲に選挙などの際どう云ふことをしてもよいと云ふことでは困ります。さう云ふことが政界腐敗の因となるのであります。

又實業家にしても自分の仕事を盛んにしたい、手早く金儲をしたいと云ふことを目的とするのは結構なことでありますが、儲ける爲には、どう云ふことをしてもよいと云ふことでは非常に困ります。

所が心學にはさう云ふことがチャンと言つてあります。これも京都の話で、話は大分尾籠でかう云ふ所で讀むのは恐れ入りますが、大變面白いと思ひますから讀んで見ます。

これは都の咄でござりまするが、花の頃に成りますると、嵐山御室の櫻がりとて、京中の貴賤皆花見にまゐります。其中には大家の奥様、或は娘御、または遊女町の藝子、女郎、衣裝に花をかざりこゝを晴と見物にまゐりまする事ぢや。嵐山までは京をはなれて一里半ばかり、何んぼ美しうかざりたてた娘御でも、出ものはれもの所きはすといふ譬への通り、途中で便所へ行きたい事がある。流石に野中で尻もまくられず、通り筋の見苦しい百姓家へかけこんで、御無心ながら、てうづ場をちよつと御かし下されませと、赤い顔して斷りいひ、裏口へ出て見た所が、うそぎたない菰だれの雪隠、これには京の女中がたが、毎年大きに困る事でござります。成程人間かしこしと申して、ある通り筋の小百姓が、此事を考へ出して、かし雪隠といふ事を始めました。其趣向は、門口に雪隠をたて、側に手洗鉢をすゑ、墨ぐろに、かし雪隠一度三文、とかき付けた看板を懸けました。尤もこれは甚だ面白い趣向で至極重寶な事ゆゑ、花の頃はけしからず流行ります。勿論これは兩徳の趣向で、女中がたは赤い顔して口たれて、きたないめをせいでも、三文で挨拶なしに、我家の雪隠へはいるやうな顔付して、用がとゝのひ舛。又雪隠のかし元は三文のかし代をとるばかりぢやない、後へ糞がのこります故、これも至極勝手がよろしい。全くかしさしきからおもひ付いた趣向とみえまして、此ごろめつきり身代を能ういたしました。或人の道歌に

よい中も近ごろうとく成りにけり

となりに藏をたてしよりのち

とかく人の錢もうけが羨ましくて、又ねたましくて、かちおとしてなりとも、己が田へ水が引き

たい例の身最負勝手の強慾ものが、其村方にござりまして、あるとき女房をよんで相談には、八兵衛が近頃かし雪隠で、めつきり錢儲をしをる。おれも此春はかし雪隠をこしらへて、八兵衛の錢まうけをたゞきおとしてやらうと思ふが、どうであらうぞ。女房中々合點せず、夫れはこなたわるい分別ぢや。たとへこちのかし雪隠をこしらへた所が、八兵衛殿は仕にせも古う、得意もたんとあるであらう。こちはまた新店なり、はやらぬ時は、貧乏の上ぬり、それはやめにさつしやるが能からうといへば、イヤ／＼それはわれが何も知らぬによつてぢや。此度おれが思付いた雪隠は、八兵衛のやうなきたない雪隠ではない。當時京の町は、茶の湯がはやると聞いたゆゑ、茶かたの雪隠をたてるつもりぢや。先づ四本柱はよしの丸太ではきたない。北山の入節をつかひ、天井は蒲天井にして蛭釘をうつて釣釜のくさをぶらさげて、きばり繩のかはりに用ゐるのぢや、ナントきめう敷。窓は下地窓、ふみ板はけや木のじよりんもく、きん隠しは、さつま杉、穴のぐるりは蠟色ぶち、壁は中ぬりの切かへし、戸は檜の長へぎ、白竹おさへ、屋根は杉皮、青竹おさへのわらび繩、大和ぶきにこしらへ、杏ぬぎはくらま石、傍に青竹まじりの四目垣、橋杭の手洗鉢に、かゝりの松はしよろ／＼とした女松をあしらひ、千家でも遠州でも有樂でも逸目でも、何でもかでも取こめるこしらへ。おそらくはいこつを出したら、八兵衛の雪隠はへたばるにちがひはないと、自慢顔にいひならべると夫れは綺麗でよからうが、かし代はなんぼ取るのぢや。しれた事一度が八文よ。いやいやそれはわるい分別、茶方でも水方でもどちらのみちきたない所、三文でも安い方がヤツパリはやりさうな事ぢやに、必ずそれはやめにして下されといへば、何をぬかすやら、女賢うて牛うられぬと、さいくはり

う／＼仕上げを見をれと、かの亭主が無理に工面して、とう／＼此春間にあふ様に、立派な雪隠をこしらへました。勿論かんばんは醫者殿敷、坊さまを頼んだと見えて、唐様でかし雪隠一度八文と書いて出した。

ようした物ぢや、錢がたかいと、なんぼ綺麗でも借人がない。猫の子ものぞいて見をらぬ。ソコデ女房がぼやき出し、これぢやによつて止めさつしやれといふのに、仰山な錢かねいれて、此しまひはどうするのぢやと、疊たゝいてわめけば、亭主はおちついたかほつきして、何もやかましくいふ事はない、明日はおれが得意まはりをして來ると、借人は澤山出來る。われもはやう起きて、こほり飯をつめておけ、一べんかけ廻つてくると、門前市をなす事疑ひなしと、太平樂をいひちらして、その夜は寝る。女房は合點が行かねど、朝早う起き、めしを焚き、こほりめしをつめると、親父はいつもより朝寝して、四ツ時分に目を覺まし、茶漬喰ふと身ごしらへ、ばつち尻からげ、かのこほりめしを首筋へく／＼り付け、小遣ひせにを懐へ入れ、出かきに、コリヤかゝ、得意まはりしてくると夥しい借人があらう、モシ糞がつかへたら中入札をかけて、隣の次郎兵衛をたのんで、一荷も二荷も取つてもらへと、いひすてゝ出てゆく。ます／＼女房は不思議がはれず、どうして得意まはりが出來るぞ、京の町を何村の何兵衛が方で、かし雪隠かし雪隠と、菜や大根賣るやうにふれあるくの敷しらぬと、しあんしてゐる所へ、錢筒へ八文、錢をなげこんで、一人雪隠へはいつた人がある。此人が出ると、入かはり／＼引きもきらず借人が出て來る。嬢はびつくりし、かし代を取はづすまいと、目の玉をきよろつかして、雪隠のわきに張番をしてゐると、後には段々糞がつかへる。

ソコデ中入札をかけて、一荷こえをくみ上げる。また追々にかり人がある。とう／＼日のくれまでに、雪隠のかし代八貫文とりあげ、糞を五荷くみ出した。ソコデかゝがひとり歎び、何さまこちらの親父は文珠菩薩の再來か、さるにても得意まはりはどうして仕られた事ぢややら。此やうに流行るといふは、ありがたい事ではあると、酒をかうて待つところへ、亭主がのろりと戻つて來て、どうぢや、かり人は有つたかといふ。あつただんか、かし代が八貫、糞が五荷、こなたはどうして得意廻りをさつしやつた。京の町を一軒々々、ところ書を持つて頼みにはいらしやつたかと問へば、亭主は何をぬかしをるやら、おれが得意まはりといふは、今朝内を出て直に三文出して、八兵衛が雪隠へはいり、内から掛がねをかけて、一日隣の雪隠をふさげたのぢや。人が戸をあけかゝると内から、エヘンと咳ばらひすると、はずんではあるし、おれが所の雪隠へかけ込をるのぢや。ア、けふは仰山なせきばらひして聲がかれた。此永い日を一日つくばうてゐたれば、持病の疝氣がおこつたと腰をなでゝいはれた。

かう云ふ話を書いてあります。金儲けの爲には一日中さう云ふ所にしやがんで居る。更にひどいことには辨當を持つて行つてその中で食つて居る。女房子に見せられた姿ではない。目的の爲には手段を撰ばない、さう云ふことを痛烈に諷して居ります。今日八兵衛の様な人があるとは申しませんが、商賣に骨を折るは結構であるが、余りさう云ふことのみを走ると、結局かう云ふことにならんとも限らない。甚だ消極的なことを申す様であります、結局自分を抑へると云ふことが自分も延



び人をも延ばす道であると云ふことを言つて居るのであります。

今一つ奥田頼杖と云ふ人の「心學道の話」と云ふ書があります。廣島の人で、文章も話もこの方がよいと思ひますから一二読んで見ます。

あの狸々絆といふ物は唐土の海に居る狸々の血をとつて染たのが、正眞の狸々絆じやとかいひます。すが其狸々といふものは、人の通りにもものもよういひ、至つてかしこいものゆへ捕るゝ事をまへからよう知つて海の底へふかく隠れるから中々手に合はぬものじやげな。されど又人間の智慧はかくべつで、狸々は酒を至つて好くものゆへ、酒の匂を嗅するといづれ海からあがつて來るといふ事をちやんと知つて居ますから酒瓶へ酒を入れて、柄杓をそへて海ばたの草原へ幾數もならべ置きさてそれから其邊にはへた草をはへなりに取てむすび合して沓の形を、いくつもつくつて置いて番人は遠方にかくれて見て居ますと、其酒の匂ひが海の底へもとふると見へて、狸々どもが鼻をびこ／＼させて、これや三助狸々よ何かよい匂ひがするじやないか、これやか酒じやが何と海からあがるふじやないかといふと、三助狸々が、いや／＼めつたにや揚られぬぞ、あれを已等達に吞せて酔せておいて打ころそふといふ恐しい計畧じやといふと、一疋の狸々が、何さあがつても吞せへせねばよ、爰に居て海の青臭ひにほひを嗅よりは、あそこへ往て酒の匂ひをかぐほうが、よいといふと皆の狸々が、なるほどさふじや嗅ばつかりは大事あるまい、さあ／＼みんな來いといふて、そろり／＼水をはなれて酒瓶の側へ來て見ると、それは又海の底から嗅いだやうなものじやないゆへ、皆がこれ

やよい匂ひじや、どふもたまらぬと鼻をびこ／＼させて瓶のまわりをうろ／＼仕たるが、又一疋の狸々が、これや嗅ばつかりじや、どうも堪られぬ、なんと一盃づゝ吞ふじやあるまいかといふと又一疋の狸々が、いや／＼めつたに手は出されぬぞ、あの今まで捕はれた狸々も皆その柄杓をおつ取つてがぶり／＼吞だゆへ、つひ酔て打ころされたのじやといふと皆が、いかさま柄杓で、のんだらわるかろふけれど少しづゝ指へつけて嘗めるくらゐは随分よからう、皆さふ仕やうじやあるまいかと毎手に指のさきへつけて少しづゝ嘗て見ると、それは又嗅だやうなものじやないゆへ行まわり歸まわりひちやり／＼なめるうち、又一疋の狸々が、どふも斯なめたばかりじや今一息足らぬやうな、柄杓をとつて吞といふても腹一ぱい吞さへせねば酔氣遣ひはあるまいから、少しづゝ酔ぬ位に吞ほうがよからうといふと、皆が又さうじや／＼と銘々柄杓を手にとつて少しづゝ吞で居るうち、又一疋がいひますには、全体酒といふものは腹一ぱい大飲して酔ねば何の詮ない事、其うへ今までころされて血をしぼられた狸々も、只酔たばかりでころされたといふでもないソレ其足下を見い、草の生なりに沓がいくつもつくつてある、其沓をはいて、いらざる躍をおどつたゆへ、つい轉で殺されたのじや、只酔たばかりが何にも怖い事はないといふと、外の狸々もヲ、サさうじや／＼酔ても沓をはきさへせにや打ころされるきづかひない。そんなら酔だけ吞め／＼と幾はいるぐい／＼吞で大きに酔とおつなもので、どうもその沓がはきたくて／＼ならぬげな、そこで又皆がいひますは、何とちと沓をはこふじやあるまいか、履ても躍さへおどらねば轉ぶ氣づかいはあるまいから只歌ばかり諷て居よふと銘々に沓をはいて手拍子とつて諷ひますうち、どうも足拍子がとりたくてならぬやうになるげな、

そこで又一疋が、ころばぬやうに足びやうし一つ履てはどふかといひますと、皆一同になるほどよからふ、轉ばぬやうに一つやらふと足をあげると、ころりと轉で、つい打ころされて血をとらるゝといふ事じや、しかしこりや遠い唐のはなしで、むかし有た事かない事か、その事は存じませぬが、今は此日本に大分このやうな狸々が見へます。

悪いことは少しづゝ入る、悪いと承知しながら之位なら差支へなからうと云ふことになる。今は此日本に大分このやうな狸々が見へますと云ふのは今日に大分あてはまるのであります。それから續いて、これは上品な話でありませんが、吉原の花扇の話を読んでみます。

昔吉原の扇屋に花扇といふ名高い女郎が有て、それに尻毛をぬかれたものが幾人といふ數かぎりはなかつたと申しますが、其頃、或所に代々講の寄合があつて、いづれも酒に酔、銘々の手がらばなしを仕おりますうち、一人の男が云ますは、いや誰が何といふても、おれにはかなわぬわへ、おれは是吉原で當時の全盛あふぎやの花扇と二世の契をして起誓をかゝせ、指まで切せた男だと自慢をしましたなれば、又一人の男がいゝますは、それやどふも合點がゆかね、其花扇はおれにこそ心中をたて、命でも呉るといふ起誓を書いて小指まで切て呉てあるもの、貴様に指を切つてやるはずがないといひましたれば、かの男が大きに腹をたて、何おれが嘘をいふものか、其小指はおれが現在こゝに貰ふて持て居ると、守袋からうやくしく出して見せるを取て見れば、成ほど花扇が自筆の起誓

に、干大根のやうな指じやゆへ、一人の男も大きに驚き、そんならおれに呉たのはと懐中から出して見れば、同じ起誓に同じ指ゆへ、たがひに惘れて居る所、傍に見て居る一人の老人が、それやおかしい事じや、おれも爰に貰ふて居るがと、珠數袋から出しかけると、あちらの隅に居る人も、それやこつちにも、おれがのも疑しいと出したも、やつぱり同じもの、そこで五人が膽をつぶして、これやどふしたのじや、起誓の書やうも同じ事、其うへ何ほど全盛な花扇でも、小指が五本あるふはづがない、さては熱く化されたのかと、互に腹を立るばかり、何とつまらぬものじやないか、それじやといふて此指がまんざら干大根じやア誰でも合點はしませぬ、がコリヤどふしたものぞといふとむかしは是があつたげにござります、罪人が月々御仕置にあふて、死骸を取捨になつた時、その者の小指の先を非人が切て貝に入、ひそかに賣るを買取て起誓にそへて遺るのじやげな、客はそれとは夢にも知らず、さても深切な女郎じやと親の死期にも出た事のない泪をこぼして、ありがたさうに守袋へ入て首にかけるとは、なんとまあ能狸々じやござりませぬか、若い衆は此やうな脊をはかぬやう御用心なさりませ。扱その五人は腹の立まゝ、何でも花扇に面恥をかゝせてやらんと我化された恥はおもはず、五人連で吉原の扇屋へゆき、二階へ通つて銘々の起誓に、かの贖指を括りつけ向ふの鴨居へ進上物の張出し見るやうに、ずらりと並べて張つけ、花扇が出て来るを、りきみかへつて待て居ると、やがて花扇はしづくとそこへ出て来て、これは皆さん御揃でようこそ御出と、いひましたれば、五人はみな大きな顔して、いや今日はよう來たのじやない、わるふ來たのじや、あの向ふの鴨居を見よ、よくもおれらを、おのれは化しおつた畜生め、わりやあのやうに

小ゆびが五本あるか、さあ返答どふじやと詰かけましたれば、花扇は道の全盛ゆへ手は幾本もある奴と見へて、わざと顔を眞赤にし、しばらく、さしうつむいて居ましたが、やう／＼と顔をあげ涙を流していひますは、扱も／＼おはづかしい、その御腹のたつは御道理、このうへは私が身のうへの有體を皆様へ御詫のため、一々懺悔いたしませふ、御聞なされて下さりませ。元わたくしが親里は遠國の小百姓、家内八人にわづかの田地をもち、ほそ／＼其日を送るところ、祖父さまの長のわづらい、祖母さまは眼が見へず、其うへに爺さんまで足腰たゝぬ中風の病、野山のかせぎも出来ませねば、かゝさんが女の手一つで、それは／＼つらいかせぎ、小供は多し借金がかさなる、どふも仕やうのないところ、私が丁度十才の年、皆無とやらいふもので稗一粒も取れぬ不作、御年貢の金につまり、上納せねば田地があがる、さすれば親子八人が路頭にたゝねばならぬ仕合せ、その時にかゝさんが、不便ながらも八人の命にはかへられぬと、涙ながらに私をこの家の内へ賣られました。其時に金出して買ってくれたが此方の親かた、さすれば今の親かたは、親子の爲の命の親、大恩ある主人ゆへ、一人も大勢お客をとり、主人へ金の儲かるやう、嘘を上手に商ふが今の主人へわたくしが奉公、それゆへ、わたしが眞實に切りましたは、是の左の手の小指、御覽の通りたつた一本、そのほかはみな贋指、そのうへ實を申すれば、只今こゝに御出るはたつた五人さまなれど、まだその他に江戸中へ、配ておいた指の数は、何十本やら知れませぬ。わたしも此やうに年中うそを商へば、未來の所おそろしく、嫌な事とは存じますが、ぞこが苦界の身のかなしさ、どうぞ不便とおぼしめし、御堪忍なされて下さりませ、と涙ながらに斷をいひましたが、しかしナアといひながら、

涙をほろ／＼とこぼし、どうも斯五人ならんで御さつては誰殿とさしては申されぬが、あの五枚の起誓のうち、たつた一枚わたしが眞實に思ひ込んで、これ此小指を此やうに切て上たもござりますに、その御方の胴慾な、嘘かまことか御こゝろに大體おぼへが、ありそなもの、外の御方もおなじやうに、うたがい深いなされかた、わしやぞればかりが怨めしいと、わつと此所へ平伏たら五人はみな貰ひ泣して、それや尤じやと一同に得心して、扱銘々思ひますは、實におれにはいつぞやら、あれが斯いふた事もある、又あゝも仕て呉た、さふ見れば今あれが眞實の分といふは、おれが分にかがひないと、一人が思へば一人も思ふゆへ、鴨居にはつた起誓と指を、銘々取ちがへせぬやうにそつと取て懐へいれ、皆さま御さきへ、はい左やうならと、おもひ／＼に扇屋を立出二三町かへる風俗で、めい／＼に思ひますは、何でもおれに違ひはないが、此まゝに歸つては花扇が心中にも嗚情なしおもふである、ドレ、ちよつと逢て斷りいふてと、後へとつてかへしたら、五人一度に扇屋の前で出合たと申、古い咄がござりますが、何といろ／＼な狸々もあるものじやな。

落ちがよく出来て居ります。さう云ふ風に外のことに迷つて自分の本心を取失つてはいけないと頻りに教へるのであります。

心學は京都から出たものでもありませんし、今日は翻刻本も出て居りますし、又かう云ふ古い本もないこともございせんから讀んで頂けば面白いものでございます。心學は今の言葉で申せば社會教化とでも申しますか、教化とは申すまでもなく學校教育が今は本體になつて居る。これは結構なこ

とに相違ないが、私共も永年學校教育に關係して居りますが、どうもこれだけでは足りない氣持が致します。殊に今日非常に遺憾に思ひますことは、前に目的と手段と申しましたが、目的の爲には手段を選ばないと云ふ傾が濃厚で凡てのものが手段になり過ぎて居ります。教育にしても小學校の教育は中學へ入る手段、中學は高等學校へ入る手段、高等學校は大學教育の手段と云ふ譯で凡て手段になつて居る。本當に學問そのものを目的として居らない。これは時勢の關係で已むを得ないことの様であります。もう少し之を建直し本當の人間を作る爲に眞理を教へ學ぶ教育と云ふものが欲しいのであります。現在では教育は學校ですと云ふことになつて居ります爲、我々にも覺へがりますが、中學の時數學がいやで／＼堪らない。卒業證書を貰ふと數學の教科書など棚の上に放り上げて喜んで居りますが、學校を出ると皆勉強しなくなる、それではよろしくない、これは今の學問のやらせ方が悪いので、學問は面白いと云ふことを教へない、いやであつても仕方なくやらせて居ると云ふやり方である爲と思ひますが、之はどうも残念で本當の學問と云ふことを國家が力を大いに入れて將來やらなければならんと思ひます。此頃文部省でもその点に力を入れ、社會教育局と云ふ様なものも先年出来ましたが、どうもかう云ふことはお上の仕事では具合よく行かない、社會教育は皆が骨を折るのがよからうと私は考へるのであります。さう云うことで今から十年前になります。文部省の當時初代の社會教育局長をして居られた關屋氏と話し合ひ、文部省の御手傳なり別動隊として、社會教育協會と云ふものを作り私は理事長を致して居りますが、及ばずながらたゞ理事長と云ふ名前を持つて居るだけでなく自身暇があれば方々駆けまはつて骨を折つて居りますが何分

微力で十分なことが出来ません。十年やつて來ましたが洵につかまへ所のないむづかしい仕事で思ふ様になりませんが、現在として一番大切なことは小學校なり或は中學校を出た者が本當の大人になるまでの教育をどうするか、例へば高等女學校を了へた者が嫁に行くまで數年ある、その間家庭で家事をやるのも無論結構であるが、一方もう少し學問をしたいと云ふ氣持がある男子であれば尙更である、そこを何とかしなければならん。今度青年學校が出来ましたのもその意味でありませうが、それが若し規則づくめな學校なら益々學校はいやなものだと云ふ感じを強くする。皆が自發的に面白く十分勉強する様にして頂きたいと思ひます。今までの教育と云ふものは我々にも責任はありますがどうも智識教育に偏して居る、それも勿論結構で、智識は與へなければならんがそれ以外にもう一步進んだ見識と云ふものを養ふことが必要であります。世の中のことに對する正しい判断力を與へると云ふことが肝要である。それから今の學校教育はどうも斷片的であります。例へば教科書にしても斷片的によい文章、よい材料はあるが一貫した精神がないから讀む者に本當の感銘を與へない、私共教科書のこととは直ぐ忘れて了ひましたが、その間に讀んだ心學道話の様なものはいく覺へて居ります。

大學生などよく物を読みますが、初から終まで讀み通し面白いからもう一度讀んで見やうと云ふ様なことは少いと思ふ。或は大學の入學試験の時など外國語の試験を見るとむづかしい單語などよく知つて居るに拘らず、全體の意味が分らん、一體何を論じて居るのか譯が分らん、一字も知らん字は無かつたのにどうして落第したんだらうと苦情を言ふ人もあるが、字は知つて居つても意味が

解らん、かう云ふことでは困ると思ひます。

社會教育、青年教育と云ふものは今の言葉で申せば再教育と言ふか、さう云ふものは今日の日本を益々大ならしむ爲に非常に必要なことで私共甚だ微力で十年かゝつて大したことも出来ませんが分相應に仕事を進めて見たいと思つて居ります。

今日日本は實に偉いものになつたもので、今日も神戸で縣廳に参りますと、滿洲國皇帝陛下御來朝に就いて御警衛の話が出ましたが、明治二十四年でしたか大津事件と云ふのが起りロシアの皇太子が來られた時に津田三造と云ふ巡查が切りつけた、これは御年輩の方はよく御承知でありませうが、その時は日本全國上下擧つて實に心配したもので今にも日本はロシアに取られて了ふ様に心配したと云ふ話であります、その時分と今日とを比べて見ると實に隔世の感があります。先程も日清戦争の時のことを讀んで居りましたが、當時の我海軍の總噸數は僅かに五萬何千噸、今なら大戦艦二隻でそれ以上になるかも知れません。それ程日本は偉いものになつた、殊に産業方面に於いては非常に盛んとなり世界の先進國が脅威を感じ色々日本の發展を阻害せんとして居るが安くて品のよい日本品はどん／＼出て行く、かう云ふ点は愉快であります、併し世界各國は何んだか日本を警戒して居る、日本自らも名譽の孤立だと威張つて居りますが、出来ることなら本當に日本が國際的に信用を博し、日本が在るお蔭で世界が平和であると云ふ所まで行かなくてはなりません。その爲には日本人は見識を養つて大局を見ると云ふ様にならなければならん、さう云ふ修養をする爲には心學などは古い學問で甚だ消極的の様に若い人は思ふかも知れませんが、本當に自分を抑へるこ

とが出来ると云ふことは非常に積極的なことであると思ふのであります。

さう云ふ意味でたゞ單に智識を興へると云ふことだけでなく、更に見識を興へると云ふ方面に於いて私共社會教育の仕事に骨を折つて居りますが、色々御指導と御援助をこの機會に願ひ致します。

今日は何も用意致して居りませすたゞ持合せた本を讀んだゞけであります、却つて未熟な意見を申上げるよりよかつたかとも思ひます。私のお話は之位に致して置きます。

—(拍手)—

昭和十年六月十五日印刷  
昭和十年六月二十日發行  
【非賣品】

編輯兼發行者 京都市上京區紫竹桃ノ本町二十二番地  
後藤正治  
印刷者 京都市中京區三條通柳馬場東入  
小澤與理太  
印刷所 京都市中京區三條通柳馬場東入  
合資會社 點林堂印刷所

發行所

京都經濟會

京都市中京區高倉通錦小路上ル五百六十五番地  
社團法人京都銀行集會所內  
電話本局三一四一番(4)

終

67  
3